

## あとがき

『立命館 史資料センター紀要』も第3号を発刊する運びとなった。本紀要に寄稿いただいた先生方に感謝を申し上げるとともに、本学学園史を学術的に解き明かす本紀要が、読者にとって立命館のこれまでの歩みを知り、これからの挑戦への一助となることを願うものである。

立命館 史資料センター（以下、史資料センター）は二〇一五年一〇月の開設から、間もなく五年目を迎える。大学史資料の収集・管理・利用を司る史資料センターの事業はこの間大きく前進してきたが、デジタル化・オープン化の時代を迎えてその事業内容は大きく変化しつつある。

大学には、図書館や博物館をはじめ各研究所等が長年にわたり蓄積してきた貴重な学術資料や文化資産が膨大に存在している。また大学で行われている学術・文化・スポーツなどの様々な活動、さらには人々が歴史を刻んできたキャンパスの記憶―歴史的な建造物、四季折々の風景、地域の歴史や地理・地誌等―は大学が有する貴重な学術・文化資産といえる。しかし現状では、これらの学術・文化資産は学内に散在しており、あるいは記録・保存されることなく消失・消散し、あるいは記録・保存されていても積極的な活用がなされている例は極めて少ないと推察される。

史資料センターではこれらの学術・文化資産を大学の有用な資源（＝学術・文化資源）と位置づけ、図書館・国際平和ミュージアムとも連携し、デジタル空間およびリアルな空間（＝物理環境）の両面において、積極的に収集・保存・管理・活用を図り、大学が目指す教育・研究・社会貢献に寄与することを目指してい

る。現在すでに、「西園寺家寄贈資料デジタルアーカイブ」、「衣笠キャンパス学術文化資源マップ」作成、「学園史に関する常設展示施設」の設置提案等の取り組みを進めているところである。

学園では現在、二〇二〇～二〇三〇年を見据えた「R2030」事業の具体化議論が進められている。

二〇二〇年代以降の史資料センターの役割は従来にもまして重要になるとともに、大学における「新たな価値創造」を担う機関として、さらなる発展の可能性を秘めていると感じている。史資料センターのこれらの取り組みに注目頂き、一層のご理解とご協力をお願いしたい。

学術情報部次長 近藤茂生